

第29回夏期福音特別集会（1）（箱根湯本）

創造の神・救贖の主

――イザヤ書第40章、41章――

1982年8月20日

小池辰雄

偉大なる知られざる人 慰めよ 神の行動的な恵み 瞬間の姿に永遠を見る 本願の効力 キ
リスト化 本来は無者 十字架と聖霊 永遠を持つ 無即無限 無と夢 キリストの無者 満
月を抱く三日月 創造と救贖

【イザヤ40】

1 なんじらの神いいたまわく、なぐさめよ汝等わが民をなぐさめよ。2 懇ろ
にエルサレムに語り之によばわり告げよ、その服役の期すでに終り、その咎
すでに赦されたり。そのもろもろの罪によりてエホバの手よりうけしところ
は倍したりと。

3 よばわるものの声きこゆ云く、なんじら野にてエホバの途をそなえ沙漠
にわれらの神の大路をなおくせよと。4 もろもろの谷はたかく、もろもろの
山と岡とはひくくせられ、曲りたるはなおく、崎嶇はたいらかにせらるべし。
5 斯てエホバの栄光あらわれ人みな共にこれを見ん。こはエホバの口より語
りたまえるなり。

6 声きこゆ云く、よばわれ。答えていう何とよばわるべきか、いわく人は
みな草なり。その栄華はすべて野の花のごとし。7 草はかれ花はしほむ。エ
ホバの息そのうえに吹きければなり。実に民はくさなり。8 草はかれ花はし
ほむ。されどわれらの神のことばは永遠にたたん。

9 よき音信をシオンにつたうる者よ、なんじ高山にのぼれ。嘉おとずれを
エルサレムにつたうる者よ、なんじ強く声をあげよ。声を揚げておそるるな
かれ。ユダのもろもろの邑につげよ、なんじらの神きたり給えりと。10 みよ
主エホバ能力をもちて来りたまわん。その臂は統治めたまわん。賞賜はその
手にあり。はたらきの値はその前にあり。11 主は牧者のごとくその群をやし
ない、その臂にて小羊をいだき、之をその懷中にいれてたずさえ、乳をふく
まする者をやわらかに導きたまわん。

12 たれか掌心をもてもろもろの水をはかり、指をのぼして天をはかり、ま
た地の塵を量器にもり、天秤をもてもろもろの山をはかり、権衡をもてもろ



もろの岡をはかりしや。¹³ 誰かエホバの霊をみちびき、その義士となりて教えしや。¹⁴ エホバは誰とともに議りたまいしや。たれかエホバを聴くし、これに公平の道をまなばせ、知識をあたえ明通のみちを示したりしや。¹⁵ 視よもろもろの国民は桶のひとしづくのごとく、権衡のちりのごとくに思いたもう。島々はたちのぼる塵埃のごとし。¹⁶ レバノン^{レバノン}は柴にたらず、そのなかの獣は燔祭にたらず。¹⁷ エホバの前にはもろもろの国民はみななきにひとし。エホバはかれら^なを無もののごとく、空しきもののごとく思いたもう。

¹⁸ 然ればなんじら誰をもて神にくらべ、いかなる肖像をもて神にたぐうか。¹⁹ 偶像はたくみ^い鑄てつくり、金工^{かぬち}こがねをもて之をおおい、白銀をもて之がために鍔をつくれり。²⁰ かかる宝物をそなえざる貧しきものは朽つまじき木をえらみ、良匠^{よきたくみ}をもとめてうごくことなき像をたたしむ。²¹ なんじら知らざるか、なんじら聞かざるか、始めよりなんじらに伝えざりしか、なんじらは地の基をおきしときより悟らざりしか。²² エホバは地球のはるか上にすわり、地にすむものを蝗のごとく視たもう。おおぞらを薄絹のごとく布き、これを住うべき幕屋のごとくはり給う。²³ 又もろもろの君をなくならしめ、地の審人をむなくせしむ。²⁴ かれらは僅かに植えられ僅かに播れ、その幹わずかに地に根ざししに、神そのうえを吹きたまえば、即ちかれて藁のごとく暴風にまきさらるべし。²⁵ 聖者^{せいじや}いい給わく、さらばなんじら誰をもて我にくらべ我にたぐうか。²⁶ なんじら眼をあげて高をみよ、たれか此等のものを創造せしやをおもえ。主は数をしらべてその万象をひきいだし、おのおのの名をよびたもう。主のいきおい大いなり、その力のつよきがゆえに一をも欠くることなし。

²⁷ ヤコブよなんじ何故にわが途はエホバにかくれたりというや。イスラエルよ汝なにゆえにわが訟^{うったえ}はわが神の前をすぎされりとかたるや。²⁸ 汝しらざるか聞かざるか、エホバはとこしえの神、地のはての創造者にして倦^うみたるものごとくなく、また疲れたものごとくなく、その聡明こと測りがたし。²⁹ 疲れたものには力をあたえ、勢力なきものには強きをまし加えたもう。³⁰ 年少きものもつかれてうみ、壮なるものも衰えおとろう。³¹ 然はあれどもエホバを俟望^{まちのぞ}むものは新なる力をえん。また鷺のごとく翼をはりてのぼらん。走れどもつかれず、歩めども倦^うざるべし。

【イザヤ41】

¹ もろもろの島よ、わがまえに黙せ。もろもろの民よ、あらたなる力をえて近づきたれ。而して語れわれら寄り集いて論らわん。² たれが東より人をおこししや。われは公義をもて之をわが足下に召し、その前にもろもろの



国を服せしめ、また之にもろもろの王をおさめしめ、かれらの剣をちりのごとく、かれらの弓をふきさらるる藁のごとくならしむ。³斯て彼はこれらのものを追い、その足いまだ行かざる道をやすらかに過ぎゆけり。⁴このことは誰がおこないしや、たが成ししや、たが太初より世々の人をよびいだししや。われエホバなり、我ははじめなり終りなり。⁵もろもろの島はこれを見ておそれ、地の極はおののきて寄り集いきたれり。⁶かれら互いにその隣りをたすけ、その兄弟にいいけるは、なんじ雄々しかれ。⁷木匠は鉄工をはげまし、鋤をもて平らぐるものは鉄礎をうつものを励ましていう、接合せいとよしと。また釘をもて堅うして揺くことなからしむ。

⁸然どわが僕イスラエルよ、わが選めるヤコブ、わが友アブラハムの裔よ。⁹われ地のはてより汝をたずさえきたり、地のはしよりなんじを召し、かくて汝にいえり、汝はわが僕、われ汝をえらみて棄てざりきと。¹⁰おそるるなかれ、我なんじとともにあり、驚くなかれ、我なんじの神なり、われなんじを強くせん、誠になんじを助けん、誠にわがただしき右手なんじを支えん。

¹¹視よなんじにむかいて怒るものはみな恥をえて慌てふためかん。なんじと争うものは無きもののごとくなりて滅亡せん。¹²なんじ尋ねるとも汝とたたかう人々にあわざるべし。汝といくさする者はなきものの如くなりて虚しくなるべし。¹³そは我エホバなんじの神はなんじの右手をとりて汝にいう、懼るるなかれ、我なんじを助けんと。¹⁴またエホバ宣給う、なんじ虫にひとしきヤコブよイスラエルの人々よ、おそるるなかれ、我なんじをたすけん。汝をあがなうものはイスラエルの聖者なり。¹⁵視よわれ汝をおおくの鋭齒ある新しき打麦の器となさん。なんじ山をうちて細微にし、岡を糞糠のごとくにすべし。¹⁶なんじ簸げば風これを巻きさり、狂風これを吹きちらさん。汝はエホバによりて喜び、イスラエルの聖者によりて誇らん。

¹⁷貧しきものと乏しきものと水をもとめて水なく、その舌かわきて衰うる時、われエホバ聴きてこたえん、我イスラエルの神かれらを棄てざるなり。¹⁸われ河をかぶろの山にひらき、泉を谷のなかにいだし、また荒野を池となし、乾ける地を水のみなもとと変ん。¹⁹我あれのに香柏、合歡木、もちの樹および油の樹をうえ、沙漠に松杉及び黄楊とともに置かん。²⁰かくて彼等これを見て、エホバの手の作したもうところイスラエルの聖者の造り給う所なるをしり、且ここをとめ、且ともどもにきとらん。

²¹エホバ言給く、なんじらの道理をとり出せ、ヤコブの王いいたまわく、汝等のかたき証をもちきたれ。²²これを持ち来りてわれらに後ならんとする事をしめせ、そのいやさきに成るべきことを示せ、われら心をとめてその終



をしらん。あるいはきたらんとする事をわれらに聞かすべし。²³なんじら後ならんとすることをしめせ、我儕^{われら}なんじらが神なることを知らん。なんじらあるいはさいわいし、あるいはわきわいせよ。我儕^{われら}ともに見ておどろかん。²⁴視よなんじらは無^なもののごとし。なんじらの事はむなし。なんじらを撰^{えら}ぶものは憎むべきものなり。

²⁵われ一人を起こして北よりきたらせ、我が名をよぶものを東よりきたらしむ。彼きたりもろもろの長^{おさ}をふみて泥^{ひじ}のごとくにし、陶工^{すえつくり}のつちくれを踐^ふむがごとくにせん。²⁶たれか初めよりこれらの事をわれらに告げてしらしめたりや。たれか上古^{いにしえ}よりわれらに告げてこは是^ぜなりといわしめたりしや。一人だになし、一人だに聞かするものなし。一人だになんじらの言をきくものなし。²⁷われ預^あじめシオンにいわん、なんじ視よかれらを視よと。われ又よきおとずれを告ぐるものをエルサレムに予^{あた}えん。²⁸われ見るに一人だになし。かれらのなかに謀略^{はかりごと}をもうくるもの一人だになし。我かれらに問えど、こたうるもの一人だになし。²⁹かれらの為^{わざ}はみな徒然^{いたずら}にして無きもののごとし。その偶像是風なりまた空しきなり。

●偉大なる知られざる人

第二イザヤ書というのはイザヤ書全66章の中でちょうど真ん中です。その前半が40章から48章で、後半が49章から55章です。前半はほとんど全部、詩文で――44章8〜20節のところだけが散文です――波濤が押し寄せてくるような響きをもっている。「第二イザヤ」と呼ばれるのは無名の預言者で名前は無い。ドイツの学者が第二イザヤのことを

「偉大なる知られざる人」

と言っている。作者が匿名で書いたか、実際分からなくなってしまうたか、そのことも分からない。とにかく、神の声の響きだけが伝わっている。第二イザヤは正に

「無者」

なんです。その無者の偉大な音信を我々は学びたい。もちろん、私は解釈をするのではない。イザヤの魂の響きに従って告白したいと思います。

客観的な情勢を少し申しあげると、名の知れているイザヤは「第一イザヤ」という1章から39章までで――もつとも、その中の35章は多分第二イザヤの中に入るのではないかとされている――イザヤ書1章に書いてあるように、「アモスの子イザヤ」の預言者です。これは紀元前740年から701年にわたる非常に長い40年間の預言が主体をなしている。預言者としての生命はイザヤが一番長い。その次に長いのはエレミヤですが。

北イスラエルはアッシリヤに、南ユダはバビロニアに滅ぼされたが、ユダの国の第一回の捕囚が紀元前597年、第二回の捕囚が紀元前586年です。第二回の捕囚が決定的な捕囚で、主



な人がみなバビロニアに移された。それから半世紀の間、538年まで捕らわれた。即ち、やがてペルシヤ王となるクロスがこのバビロンを滅ぼしたのが538年ですから、ちょうど半世紀になります。そのバビロニア捕囚半世紀の終りの頃に、クロス王がイスラエルの民をパレスチナへ、その都のエルサレムへ帰してやる。クロスが550年にメディア王となって、その近隣をみな征服したわけです。クロスは諸々の宗教に対して非常に寛大な気持をもった王様で、イスラエルの帰還ということになる。そういう捕囚から帰される時の預言、これが第二イザヤの預言です。イザヤ書は、前半(40〜48章)は多分バビロニアで、後半(49〜55章)は帰ったエルサレムで書かれたのであろうといわれている。

● 慰めよ

「なんじらの神いいたまわく、¹なぐさめよ汝等わが民をなぐさめよ。²懇ろにエルサレムに語り之によばわり告げよ、その服役の期すでに終り、その咎すでに赦されたり。そのもろもろの罪によりてエホバの手よりうけしところは倍したりと。

これを言っているのは誰かというと、これは預言者ではない。ちょうど、ヨブ記の始めのように――それに学んだのがゲーテの『ファウスト』の始めの方ですが――これもやはり天上の序曲で、天からの声です。選ばれた者たちにむかつてこう言っている。「汝等」と言われているのは預言者とその弟子たちと判断するのがどうも妥当なようです。そういう天来の響きを、声を聞いて伝えている素晴らしいところです。

「なぐさめよ、なぐさめよ、みな慰めてやれ」

と。半世紀も捕囚の労役に服した。彼らの不信の咎のために、神さまはアッシリヤやバビロニアを手足にしてイスラエル・ユダに滅びの罰を与えた。国の興亡を神の側からはつきり受けとって、それを言うということは素晴らしいことです。日本ではこういうことはない。「二億総懺悔」なんて言ったって、それは空念仏でひとつもダメです。そういう、天来からの「なぐさめよ」という声です。

「慰め」という言葉を聞くとすぐ思い出すのは、コリント後書1章です。

「讃むべき哉、われらの主イエス・キリストの父なる神、即ちもろもろの慈悲の父、^{すべて}一切の慰安の神、われらを凡ての患難のうちに慰め、我等をして自ら神に慰めらるる慰安をもて、^{なぐさめ}諸般の患難に居る者を慰むることを得しめ給う。そはキリストの苦難われらに溢るる如く、我らの慰安も亦キリストによりて溢るればなり。我らあるいは患難を受くるも汝らの慰安と救いとのため、あるいは慰安を受くるも汝らの慰安の為にして、その慰安は汝らの中に働きて我らが受くる如き苦難を忍ぶことを得しむるなり。斯て汝らが苦難に与かるごとく、また慰安にも与かることを知れば、汝らに対する我らの望みは堅し。」



(コリント後1:3-7)

ここに畳みかけて「慰安^{なぐさめ}」という言葉が出てきます。また、

「幸福^{さいわい}なるかな、悲しむ者。その人は慰められん。」(マタイ5:4)

と山上の大告白の中にもあります。マタイ伝5章3節に、

「幸福なるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり。」(マタイ5:3)

とある。これは私の「無の神学」の焦点です。この一言が身についたら、もう天国の鍵をいただいたようなもので、あとのキリストの言葉がグーッと読めてしまう。誰が何と言おうと、私は絶対にこの「無」でいきます。無が私の徴ですから。祈っていて、この無の世界に入ってしまうと、もの凄いことになる。無といったって、これは虚無ではない。

「懇ろに」というのは「心に」という言葉です。その罪咎はもう赦された。その償いをお前たちは50年間やったぞと。こういう魂の姿勢が大切です。今の日本をみると、本当に滅びに向かっています。「倍した」というのは、二倍という意味ではなく、「充分である」ということです。ユダヤ人は、

「目には目を、歯には歯を、生命には生命を」

という法則を厳然として持っていますから、罪には罰がくる。

「罪の価は死なり」

とパウロが言っているとおります。しかし、神さまが罰するのは決して滅ぼすためではなくて、贖うためです。

●神の行動的な恵み

3 よばわるものの声きこゆ^い云く、なんじら野にてエホバの途^{みち}をそなえ沙漠にわれらの神の大路^{おおじ}をなおくせよと。

天来の声が、天使の声が聞こえてきた。「道」という字はイザヤ書にずいぶん出てきます。神さまがやってらっしゃるので、自然の姿が変わるのだと。

4 もろもろの谷はたかく、もろもろの山と岡とはひくくせられ、曲りたるはなおく、崎嶇^{けわしき}はたいらかにせらるべし。

これはもちろん、ユダヤ人というのは精神的な霊的な内容のことも具体的な表現で言いますから、なにも山を崩してどうのこうのということではない。

斯てエホバの栄光あらわれ人みな共にこれを見ん。こはエホバの口より語り

たまえるなり。

「人」という字はヘブライ語では「肉」という字が書いてある。神さまが上から来臨するということです。聖書の宗教の角度はこの「上から」の角度です。モーセを通してイスラエルの民をエジプトから救い出すときにも、

「私が降りて行くから」



と出エジプト記3章に書いてある。来臨とか、降臨とかいう。こちら側からの願いよりも、神さまの直接の行動です。恵みは恩恵的行動です。

プロテスタントは、

「信仰によりて義とされる」

というお題目を信じていい気になっているから、観念になってしまふ。神の行動的な恵みによって、また恩恵的な行動によって我々は救われていく。人を助けるときも言葉ではダメです、具体的にやっていないと。祈りは具体性をもっています。具体性をもたないような祈りではダメです。祈っているうちに、「聞かれたり」という確信ならざるあるものがある。そうすると、その瞬間にグーッと響くんです、その祈られている人が知らなくても。

●瞬間の姿に永遠を見る

⁶ 声きこゆ云く、よばわれ。答えていう何とよばわるべきか、いわく人はみな草なり。その栄華^{はえ}はすべて野の花のごとし。⁷ 草はかれ花はしほむ。エホバの息そのうえに吹きければなり。実に民はくさなり。⁸ 草はかれ花はしほむ。されどわれらの神のことばは永遠にたたん。

「エホバの息」とは熱帯の風(シロッコ)だと註解者が言うけれども、これは熱帯の風ばかりではない。自然界の現象の中に神の息吹、力、愛、そういうものを彼らは感じている。ゲテという詩人がやはりその角度をもっていた。それでゲテというのは凄い。

花は枯れていく。けれども、私は花の枯れていく瞬間の姿に永遠を見る。私に言わせると、イザヤはまだ言いたくない。

「枯れていくけれども、しかし、やがてそれは天界で花が咲くぞ」

と、もう一遍言ってもらいたい。

「神の言は永遠にたつ」

という。神の言葉は永遠に力をもつてあるごとく神さまは創造した。

「明日炉の中に投げ入れられる一輪の花も、このように装う」

と、キリストはそこに神の栄光を見られた。神の業はどんなに枯れていつても空しくない。現象的にみて人間界は変転していく。自然界も変転していく。

「パンタレイ」

といって万事流転していく。それでも、枯れていくものの今の姿は――なぜこれは咲いているかという、太陽の光を十全に受けて咲いてる。作ったのではない――ここには確かに生命が宿っている。真善美は決して滅びていかない。それはただ理想的な意味で言っているのではない。

とにかく、イザヤはここでは

「神さまがなければみなダメになってしまう」



ということを言おうとしている。神の言は永遠にたつ。聖書の言葉は、ヘブライ語であろうとギリシヤ語であろうと日本語であろうと、神の根元語というものがある。神の根元語は聖書の外側の言葉の暗号なんだ。

イザヤが片一方では、人間界や自然界のはかないこともちよつと言ってますが、しかし、「神の言葉に即するならば、儚いものはかなくない。そこに永遠の姿がある」ということをもう一つ読み込んでいただきたい。でなければ、神の言が今度はヘタすると、観念になってしまふ。キリストが「枯れよ」といえばいちじくの木は枯れてしまふ、そういう世界ですから。万象は神の息吹によつて成るし、息吹によつて、またヘタすると裁かれてしまふ。生殺与奪、自由自在な世界です。

●本願の効力

9 おとずれ よき 音信をシオンにつたうる者よ、なんじ たかきやま 高山にのぼれ。嘉おとずれをエルサレムにつたうる者よ、なんじ強く声をあげよ。声を揚げておそるるなかれ。ユダのもろもろの まち 邑につげよ、なんじらの神きたり給えりと。

「なんじらの神きたり給えり」とは未来完了的な言い方です。必ず来たりたもう。そして今、もう来たりつつある姿がイザヤには見えている。クロスによつて解放されるのだけれども、それはクロス自身がやはり神さまの手足になってるのであつて、本当に神さまが来なければ、クロスがいくら強い王様であつてもダメだということです。

10 ちから みよ主 エホバ能力をもちて来りたまわん。その かいな すべ 臂は統治めたまわん。賞賜 たまもの はその手にあり。はたらきの値はその前にあり。

「国滅びて山河あり」というけれども、半世紀も国が滅びて、

「イスラエルがまた復興するぞ、エルサレムが世界の宗教的中心になるぞ」

というような意気込みをもつて進むということは、これは単なる希望ではない。預言者たちは本当に神に即してその声を聞いたからです。でなければ、こんなことは言えない。いわゆる政治家なんかには絶対にこんな消息は分からない。

「ちから みよ主 エホバ能力をもちて来りたまわん」

とある。神・キリストの力は無限の力です。

「弥陀の本願の効力」

というが、本願の効力をもつてエホバはやってらつしやる。

聖書には時々、「報い」という言葉が出てきます。キリストも使われました、

「その報いは天国において大いなり」

と。「報い」とは、

「良き種は必ず花を咲かせる、実を実らせる」

という意味です。ただ報酬という意味ではない。



11主は牧者のごとくその群をやしない、その臂^{かひな}にて小羊をいただき、之をその懷中^{ふところ}にいれてたずさえ、乳をふくまする者をやわからかに導きたまわん。

非常に力強いことを言うかと思うと、今度は非常に深い愛の消息を伝えている。これは本当に愛の力です。愛は最大の力をもっている。

●キリスト化

今度は、神さまがいかに壮大な神であるかが書いてある。

12たれか掌^{たなごころ}心をもてもろもろの水をはかり、指をのぼして天をはかり、また地の塵を量器^{ます}にもり、天秤をもてもろもろの山をはかり、權衡^{はかり}をもてもろもろの岡をはかりしや。13誰かエホバの靈をみちびき、その義士^{はかりびと}となりて教えしや。14エホバは誰とともに議^{はか}りたまひしや。たれかエホバを聴^{きこ}くし、これに公平の道をまなばせ、知識をあたえ明通^{さとり}のみちを示したりしや。

全部、神の独占活動であり、神さまの全知全能の業ではないかということ、こういう言い方をしているわけです。

15視^みよもろもろの国民は桶^{おけ}のひとしづくのごとく、權衡^{はかり}のちりのごとくに思いたもう。島々はたちのぼる塵埃^{ほこり}のごとし。

「もろもろの国民は桶のひとしづくのごとし」なんていう表現がどこから出てくるかと思う。16レバノン^{たきぎ}は柴^{たきぎ}にたらず、そのなかの獣^{はんさい}は燔祭^{はんさい}にたらず。17エホバの前にはもろもろの国民はみななきにひとし。エホバはかれらを無^なきもののごとく、空しきもののごとく思いたもう。

「エホバはかれらを無きもののごとく」の「ごとく」は要らない。

「エホバはかれらを無きもの空しきものと思いたもう」

ということ。だから、神さまが無ければ、自分は虚無だという。神さまからみれば、もう問題にならない。それを、在るがごとくに思っているのは大間違いだ。だから、「無に徹しなさい」と、逆に今度は言いたくなる。

倫理の世界では、「我と汝」ということで、もちろん神さまと我々一人ひとり是一对二です。宗教的な倫理的な角度を私は要らないと言っているわけではない。

「汝わがうちに、われ汝のうちに」

という「汝と我」ということはちゃんとある。しかし、この我が変質し変貌しなければダメなんです。この我が変質し変貌するためには、我が抜かされなければいかん。抜かされたときの我と汝の関係が本当の関係になる。キリストはそういうところに入っている。

抜かされた汝と我は二にして同時に一なんです。二即一、一即二という関係になる。なぜ、この「即」が出てくるかというと、これが聖霊の世界です。御霊という共通項がある。これが同質ですから、



「二でありながら一であり、一如でありながら二である」という神秘的な構造です。

だから、この無を通して今度はもの凄いことが起きる。ただ消えてしまうのではない。いわゆる自我とか我執とかいうものから抜けてしまう。我々はみなこれをもっている。自我、我執があるのを「罪び」という。

「万人は罪びとなり」

ということとは、すべての人はエゴイストであるということなのです。

自我が主動的である限りは絶対にダメです。平和なんか絶対に来ない。すること為すことがみなおかしいことになってくる。行き詰まってしまう。終いにはくたびれてしまう。大いに榮えているようだが、ドカーンとひっくり返える。これは霊の世界の法則ですから。これ(我)が抜かされる。逆にいうと、これが神化される。我々にとつては、キリスト化される。これは祈りの世界で体験してください。

祈り入ることです。何も熱っぽい祈りをするのではない。黙って祈っていてグーッと入ってしまう。みんなで今度は沈黙の祈りをやろうかな。そうすると、どこからバーツと爆発するから。沈黙の祈りをしているうちに、火山が爆発するようにバーツと爆発する声が始まる。それは本当の声です。何か元氣そうにただ大きな声をあげてもダメだよ、くたびれてしまう。喉が痛くなるくらいだ。元氣のいい青年はそれを時々やりたいんだよな。やつても悪くはないけれども、そのうちに分かる。一番素晴らしいのは沈黙の雄叫びということです。

●本来は無者

「創造の神」というのは自然科学的な判断からは出てこない。もし自然科学的な判断から

「神さまは万物を創造した」

なんて言ったら、それはウソだと逆に言いたい。創造というのはそういう次元の範疇ではない。それでみな信仰に躓くんです。

「科学を研究してきたら、どうも段々、創造なんてのはおかしいことになってきて、

そんなことは想像できなくなってきた」
なんて。

アメリカの天文学者にハッブルという人がいた。1889年から1953年までの人です。アメリカの最大のウィルソン天文台で銀河系の星雲の観測を自分の生涯の課題としてやった人だそうです。今の科学的認識についての宇宙の空間というものは百億光年だそうです。百億年間、光が走っている。その外は何か、それは分からない。宇宙の歴史は百億年。銀河系が一杯ある。銀河系と他の銀河系との平均距離が百万光年だそうです。どこにも中心がない。限界もなければ中心もないと書いてあった。無中心、無限界。みな、無がつく。



宇宙なんていうものは人間の想像のつかないようなものだ。マイナスの宇宙というのがあ
るそうだ。

イザヤはそんな宇宙観はもちろん持っていなかったけれども、その気合は、
「全知全能的な壮大な神に本当に参った」

ということですよ。神さまは創造した。

「お前たちははかれるか」

と。神の前には我々は

「桶のひと雫のごとし」

「無きにひとし」

という表現で、イザヤという無名の預言者は、とうてい我々の揣摩憶測しまおくそくできないところの
偉大な創造神ということを言っている。

いくら科学が素晴らしくても、科学者自身も結局分からない。ソクラテスが、

「私は分からないということが分かった」

と言った。同じようなことがゲーテの『ファウスト』の始めの方にも書いてある。

「何もできません」

と言った人がある。それはキリストです。ソクラテスは「無知」と言い、キリストは「無能」
と言った。

「私は何もできません。神さまがさせているんだ」

と。この無に徹してくださいよ。ソクラテスやキリストが無知だ無能だと言っているんだ
から、何か知ったような顔をしたらとんでもない。

「神さまには参りました。宇宙なんか分からん。やろうとしたって何もできない」

ということですよ。

しかし、神さまの中に、キリストの中に入ると、不思議に何かできてくる。それは自分
がしたのではない。皆さんが本当の仕事をしようと思ったら、無知無能に徹すれば驚くべ
きことが始まる。徹するとは何かというと、「キリストの中に入る」ことです。なにも悟る
ことではない。第二イザヤからこの無知を知るんです、

「誰が神さまと相談できるか」

と。何かできるように思ったらダメです。質的に無限無量なるものがやってくる。

我々は質的にです。量的に無限無量になんかなれっこない。これはありがたくてしょう
がない。そうしたら、天下無敵です。どんなに行き詰まっても大丈夫です。人間的に計つ
たらダメです、却って行き詰まる。「神さま！」と言って祈り込んでごらん。そこに知恵が
湧いてくるから。

イザヤが驚嘆して畳みかけて言っている。こういう言葉を読んでいると楽しくて仕様が
ない。



「島々はたちのぼる塵埃のごとし」

「エホバの前には彼らは無きに等し」

とか。本当に無いんだ。無いことを自覚しなくては。有ると思っているからダメなんだ。コリント後書6章に、

「憂うる者の如くなれども常に喜び、貧しき者の如くなれども多くの人を富ませ、何も有たぬ者の如くなれども凡ての物を有てり。」(コリント後6・10)

とある。ところが、持っているような顔をしたらダメだというところがある。

「人もし有ること無くして自ら有りとせば、是みずから欺くなり。」(ガラテヤ6・3)

「人は本来は無者であるということを目覚しろ」

ということですよ。

●十字架と聖霊

18節以下は偶像のことが書いてある。

18 然ればなんじら誰をもて神にくらべ、いかなる肖像をもて神にたぐうか。

19 偶像はたくみ鑄てつくり、金工こがねをもて之をおおい、白銀をもて之のために鍍をつくれり。20 かかる宝物をそなえざる貧しきものは朽つまじき木をえらみ、良匠をもとめてうごくことなき像をたたしむ。

21節からは素晴らしい詩だ。

21 なんじら知らざるか、なんじら聞かざるか、始めよりなんじらに伝えざりしか、なんじらは地の基をおきしときより悟らざりしか。22 エホバは地球のはるか上にすわり、地にすむものを蝗のごとく視たもう。おおぞらを薄絹のごとく布き、これを住うべき幕屋のごとくはり給う。

「幕屋」という言葉がこの句で私は好きになった。

23 又もろもろの君をなくならしめ、地の審人をむなしくせしむ。24 かれらは僅かに植えられ僅かに播れ、その幹わずかに地に根ざししに、神そのうえを吹きたまえば、即ちかれて藁のごとく暴風にまきさらるべし。25 聖者いい給わく、さらばなんじら誰をもて我にくらべ我にたぐうか。

「聖者」という言葉は第一イザヤからよく出てきます。

26 なんじら眼をあげて高をみよ、たれか此等のものを創造せしやをおもえ。主は数をしらべてその万象をひきいだし、おのおのの名をよびたもう。主のいきおい大いなり、その力のつよきがゆえに一をも欠くることなし。

万象を造る壮大な創造の神ということですよ。

27 やコブよなんじ何故にわが途はエホバにかくれたりというや。イスラエ



ルよ汝なにゆえにわが訟^{うったえ}はわが神の前をすぎされりとかたるや。
そんな小さな考えで判断するなと。

28 汝^うしらざるか聞かざるか、エホバはとこしえの神、地のはての創造者にして倦^うみたもうことなく、また疲れたもうことなく、その聡明^{さと}こと測^さりがたし。

「倦^うみたもうことなく、また疲れたもうことなく」とは、これは本当です。キリストにあると、私はほとんど疲れを知らない。眠くはなるけれども、

「ああいやになつてしまった」

と飽きてしまうことはない。

29 疲れたるものには力をあたえ、勢力^{いきおい}なきものには強きをまし加えたもう。

30 年少^{としわか}きものもつかれてうみ、壮^{さか}なるものも衰えおとろう。31 然^さはあれども

エホバを俟望^{まちのぞ}むものは新^{あらた}なる力をえん。また驚^{おどろ}のごとく翼をはりてのぼらん。

走れどもつかれず、歩めども倦^うざるべし。

「^{まちのぞ}俟望^{まちのぞ}む」という字は、ただ待ち望むというのではなく、「信賴する」という字と同じ字です。

「エホバに信賴する者は、全托する者は、新たなる力を得る」

ということ。これはただ肉体的な力ではない。靈的な力がくるから、それが肉体にも作用するだけのことはなしです。上から、祈りでもって力がくる。この数節を何回もただ朗唱しているうちに力がきてしまう。

ちようど地球が太陽の回りを楕円軌道を描いてグルグル回っているように、私たちは太陽たるキリストの靈を中心にしてグルグル回っている。楕円には二つの中心がある。見える中心(太陽)が聖^{せい}靈^{れい}です。私たちは地球のごとく聖^{せい}靈^{れい}(太陽)という光と力によってグルグル回されている。ところが、もう一つの隠れた焦点がある。それは十字架^{くわ}です。この隠れた焦点、十字架を觀念的にしよつちゅう言つて、聖^{せい}靈^{れい}という力ある焦点をいい加減にしているのが今のキリスト教です。けれども、これは楕円だから、この隠れた土台になっている焦点は必ずある。聖^{せい}靈^{れい}という靈界の太陽、常に生きたもうところのキリストの靈。御^み靈^{れい}のキリストと十字架のキリストを中心にして我々は動かされている。「聖^{せい}靈^{れい}と十字架」が無^むの神^{かみ}学^{がく}の焦点^{てんてん}です。

●永遠を持つ

41章に入ります。ここにクロスのことが出てくる。

1 もろもろの島よ、わがまえに黙せ。もろもろの民よ、あらたなる力をえて近づきたれ。而して語れわれら寄り集^{あひつ}いて論^{ろん}らわん。

これも審判の場みたいだね。

2 たれが東より人をおこししや。われは公義^{ただしき}をもて之をわが足下に召し、その前にもろもろの国を服せしめ、また之にもろもろの王をおさめしめ、かれ



らの剣をちりのごとく、かれらの弓をふきさらるる藁のごとくならしむ。

これはクロス王の勢いをこのように言ったわけです。「法廷論争」ということが註解書に書いてあった。神さまが裁判官で、原告がイスラエルで、被告がバビロンで、諸国民はその証人として喚問されている。41章から42章4節くらいまでがそのような場であると書いてあった。

³斯て彼はこれらのものを追ひ、その足いまだ行かざる道をやすらかに過ぎゆけり。(斯て彼は彼らを追いてやすらかに進む、その足は道を踏まず。)

「彼」とはクロスのことです。「道を踏まず」とは前人未到の道を行くということ、今までの道は踏まないということです。

⁴このことは誰がおこないしや、たが成ししや、たが太初^{はじめ}より世々の人をよびいだししや。われエホバなり、我ははじめなり終りなり。

(このことは誰がおこないしや、たが成ししや。太初^{はじめ}より世々の人をよびいだしし者、即ちわれエホバ、最初^{いやさき}なる者なり。而して此の我は最後^{いははて}の者なり。)

エホバが最初の者でまた最後のものである。

「始めにして終りなり」

ということとは、原因であり目的であるということ。神さまが原因で、神さま自身が目的、あるいは終末といつてもいい。目的は、神さまだから、必ず達せられる。終末、あるいは完成と言つてもいい。原因は創造と言つてもいい。原因が行動に現れると創造になる。創造とくれば今度は完成となる。始めと終りとは、創造と完成(終末)、原因と目的、これが

「アルファとオメガ」

ということです。

創造の神、終末の神。大目的を持ちたもうところの神。「始めと終り」という。ユダヤ教でもキリスト教でも、歴史の神なんです。神さまは永遠にある。永遠から創造ということが始まると、これが始めです。創造という行為をなさると、それが始めです。それが時間的に進むと歴史になる。神さまの世界は歴史の世界です。神の歴史、時間の世界です。神自体は永遠ですから、その歴史において――我々が今生きているこの歴史において、この時間において、この時刻において、今この集会をしているこの現在において――神につながっていると、そこで永遠にぶつかっているわけです。時間の流れに居たつて、永遠をもたないような時間ではダメです。

「私はいつ死んでもいい」

というのは、永遠をもっているから、死なないからです。神・キリストをもっている人は永遠をもっている。そして、相対的時間の中で生きている。相対的時間の中に永遠というもうひとつ次元の違ったものが来ている。

「聖国を来たらせたまえ」



というのは、聖国はちゃんと来ているんです。

●無即無限

仏教の世界は違う。仏教の世界では時間がない。性格からいうと、仏教は空間の世界だ。キリスト教に空間がないというのではないが、その特色から言うと、そうだというわけです。仏教は空間の世界でジーツとしている。だから、これは悟りの世界になる。悟入の世界です。仏教はどちらかというと静的です。キリスト教は動的で非常に生命的なんです。仏教は涅槃ねはん的です。そういう性格をもっている。

ところが、無の神学はどちらも持っている。もちろん、動的生命の方が主動的な性格ですけれども、東西を融合します。さすがに仏教も、

「本来東西無し南北も無し」

なんて言うが、しかし、それもやはり空間的な自覚だからです。

我々は最後の神の国に向かって、神の歴史の中を動いている。そして、動きながら常に永遠に接している。永遠的な時間の中を動いている。だから、毎日毎日が非常にはりが出てくる。そういう目的性をもっている。今の若いのは目的のない生き方をたくさんしている。若い人が悪いと言っているのではない。教育がなっていないからです。

もうこの国はいい加減なことではすまない。皆さんは烈々たる魂になってください。私が無なというのは、無限無量むりやうむりやうのもの凄い世界を言っているので、誤解しては困る。キリストが十全に働きたもう世界が、自分がぶつぶつ無になっっている世界なんだ。そのようにして祈り込むと、坐ざつていても空中に飛び上がっているような感じになる。

孔子がこういうことを言っている。

「意母なく執母しつく固母こく我母わし」

「自分の思っていることなんかありません、どうしてもこうでなくてはいけないなんてこたわりません」

と。そういう世界に入らなければ本当の道は歩けないということです。この言葉はまた西郷南洲が好きだった。

無に徹すると、その人は一番その人らしくなる。一人ひとりが世界に天下一品になる。それはインドのウパニシャッドやなにかにも書いてある。

「アナートマン」

という。「アートマン」というのは「我」です。それに「ア」という否定がついて「アナートマン」という。これが

「無我」

です。キリスト道にしろ、仏道にしろ、みな言いたいところは、一つのこの無にやってくる。一対一の教育でいい。二、三人でもいい。だから、キリストは最小限のことを仰った、



「二、三人わが名の中へと集まれ。そこに私がいるぞ」
と。一人の先生が本当に一人の生徒の魂をひっくり返したら、それが本当の教育だ。あなた方は、友人にもそういう伝道をしてください。みな伝道者です。

●無と夢

第二イザヤはクロス王を非常に買って、

「これはメシヤみたいだ」

ということが後に書いてある。神さまはクロスを使った。しかし、クロス自身はそれだけの人物ではなかったらしい。

8 然どわが僕^{しもべ}イスラエルよ、わが選めるヤコブ、わが友アブラハムの裔^{すえ}よ。

非常に親しく畳みかけた言い方です。

「わが僕、わが選める者、わが友」

と。「イスラエル」「ヤコブ」「アブラハムの裔」はみな同じことを別な言い方をしただけです。イザヤ書で大事なひとつの言葉は

「僕」「エベッド」

という言葉です。キリストは神さまの僕になりました。パウロはキリストの僕になりました。我々もキリストの僕です。フリードリッヒ大王は、

「私は国家の第一の僕である」

と言った。

イザヤ書では「僕イスラエル」と言うときに、イスラエル全体を言ったり、あるいはイスラエルの中の特に選ばれたイスラエル人、選びの器を言ったり、最後にはただ一人の人を言ったりする。三段の使い方がある。またそれがある場合には、二重の使い方をしている。だから、学者がどれかに決めようとするのは間違いで、二重の場合もある。

「僕」^{しもべ}は何のために選ばれているか。偉いから選ばれるのではない。神さまの道を伝えるために選ばれる。「選びの器」というのは他の人を救うために選ばれる。器そのものはいろいろです。皆さんはみな選びの器です。皆さんは選ばれたる者です。だから、責任がある。使命がある。と同時に、神さまの栄光をあらわす光栄がある。

神さまが、

「わが友アブラハム」

と言っている。キリストも「友」と仰った。また、我々は「子」でもある。質的に同質になつてくれば、今度は「子」になる。キリストは「神の子」であると同時に、「神の僕」です。神の意志を行ずるという使命的存在としては僕です。質的に本当に神と同質になっているから神の子です。

9 われ地のはてより汝をたずさえきたり、地のはしよりなんじを召し、かく



て汝にいえり、汝はわが僕、われ汝をえらみて棄てざりきと。

これはイスラエルの民全体に言っている。

「お前たちはずいぶん間違ったり躓いたり転んだりしたけれども、棄てないよ」ということ。また、預言者ホゼアを通して非常に深い愛のことを語っている。

聖書を見ると、イスラエルの民がうらやましい。けれども、キリスト教は西の方からグルールツと回ってアメリカを通って最後に日本にやってきた。東からも、景教やザビエルなんかやってきた。日本は東と西からキリスト教がやってきた。だから、日本は本当はキリスト教を最後に完成する栄光ある使命をもっている。両方からやってきたんだから。

皆さんは、もう遠慮は要らないから、本当の意味で我が抜かされてくると、僕の自覚、神の子たるの自覚、選ばれた者の自覚で戦ってください。人は棄てても、神・キリストは棄てない。

「どんなに躓いても転んでも私は待つているぞ、これからも棄てないぞ」

と。それに感激しなくては。私は感激している。人生マイナス78年を過ごしてきた。これからプラスにしようと思う。まだまだ私はやりますよ。自分の使命を果たすためにはどうしても百歳まで生きなければおさまらない。私は夢みたいな人間だ。夢男だ。私に負けなような夢をみてください。無と夢はまた通ずるからおもしろい。とにかく、ぶっ倒れるまでやります。

●キリストの無者

10 おおるるなかれ、我なんじとともにあり、驚くなかれ、我なんじの神なり、われなんじを強くせん、誠になんじを助けん、誠にわがただしき右手^{みぎのて}なんじを支えん。

「われなんじを強くせん」とは、

「私が汝の中に入るから私の強さを知ってくれ」ということだ。

「私はなかなか強くなれません」

なんて、強くなれはしないよ、強くなろうとしたってダメだ。キリストの力がくるから強くなるんだ。「右手」というのは力をあらわす。

「神さまに顧みられ、棄てられないで助けられ、強くされて支えられている」

と畳みかけて上から言ってくださるのは何のためか。これは神さまをあらわすためであって、我々が救われてめでたしめでたしというためではない。そこを間違わないでください。そんなことは御利益宗教だ。

「どうぞあなたの御光が、愛が、生命が、力があらわれてください、それがうれし
いんです」



と、そういうことだ。そして、それはみな人助けのためです。人を救うため、担うためです。棄身の態勢でなければそうはいきません、自分をいとおしんでいたら。

「己を愛するは罪の最大のものだ。一番悪いことは自分を愛することだ」

と西郷南洲も言っている。そういう棄身の態勢のひとを神・キリストはどしどし使いたもう。そういう境地に入ると、何かしらんが、

「あの人は本当に信頼できるな」

と人が頼もしく思うわけです。自分を棄ててかかっているから。人が良いことをしたら、大いに誉めてやりなさい。ことに上に立つ人はそれでなくてはダメです。お互いに担ぎあっている。それはみな神さまの御力が現れんがためです。

11 視よなんじにむかいて怒るものはみな恥をえて慌てふためかん。なんじ

と争うものは無きもののごとくなりて滅亡せん。

それは神がないからです。神がないような無きものになつてはダメです。誤解しないでください。

「キリストがある。自分はない。そこに本当に我ならざる我が使われるところがある」

と。仕方がないです、逆説的ですから。

私は時々手紙に自分のことを

「キリストの無者」

と書くけれども、それは恩寵の現実だから書くんです。

「私は本当にキリストの無者になりきました」

なんていうことを言っているのではない。キリストの無者という絶対恩寵の現実をいただいているから、はつきり書くんです。私自身は破れ器に過ぎません。

● 満月を抱く三日月

12 なんじ尋ねるとも汝とたたかう人々にあわざるべし。汝といくさする者はなきものの如くなりて虚しくなるべし。13 そは我エホバなんじの神はなんじの右手をとりて汝にいう、懼るるなかれ、我なんじを助けんと。

「汝を助けるから、お前は人を助けろ」

と、その先に「人を助ける」とは書いてないけれども、そう読んでくださいよ。ただ

「助けられてありがたい」

だけではダメです、

「人助けのひとになります」

ということではなけれ。懼るるなかれ」とは、

「私を受けたら懼れなき人になるぞ」



ということ。

「神さまの声を聞いたら、もう私はどうなってもいいんです」

と。

14 またエホバ宣給^{のたま}う、なんじ虫にひとしきヤコブよイスラエルの人々よ、おそるるなかれ、我なんじをたすけん。汝をあがなうものはイスラエルの聖者なり。

「虫にひとしきヤコブ」の「ひとしき」という言葉はない。

「虫なるヤコブよ、虫なるイスラエルの人々よ」

と。「あがなうもの」と「聖者」が同義語に書いてある。聖者は、聖なる神というのは、どんな罪びとをも全部自分の中に入れてしまつて、そして、「贖うひと」なんです。

「神さまは聖い^{きよ}から、私も聖くならなくては」

なんて、レビ記にはちよつとそんなことも書いてあるよ、

「エホバは聖き神なり。汝等も聖くあるべし」

と。けれども、神さまの中に贖われると自然に聖化されるだけの話です、自分で聖者になろうなんて思わなくなつて。「贖う」とは代償をもつてそれを買うこと。代償の最たるものはイザヤ書の後の方にでてくる。代償をもつて、それを神さまの^{もの}有にする。「贖われたる者」というのは

「贖われて神・キリストの^{もの}有になりました」

ということですよ。

「我々はキリストに贖われたる罪びと」

なんです。どの程度、地上でその人が何%プラスになつたか、なんてことはどうでもいい。聖霊がきていれば、質的にはそこには完全性がきている。だから、私は三日月をしょつちゅう描く。

「満月を抱く三日月かな」

と。満月を抱いている三日月のようになりなさいということです。これ(上弦の月)は必ず満月になる。聖霊は完全性をもっているから。

「汝ら、父の全きが如く全かれ」

とキリストが最高の言葉を仰つた。

「私を受けとれば完全性がくる。地上では三日月でも何でもいい。必ず満月になるぞ」

と。満月を抱く三日月、そういう気持で生きることです。

「どのくらい私は聖くなつたでしょうか」

なんて、聖くなろうとしたらくたびれてしまうよな。



●創造と救贖

15 視^{とき}われ汝をおおくの鋭^{とぎ}齒ある新しき打^{むぎうち}麦の器となさん。なんじ山をうちて細^{こま}微^{やか}にし、岡^{のみがら}を糝^{もみ}糠のごとくにすべし。

これはふるいにかけることを言っている。そして審きをする。

16 なんじ簸^{あお}げば風これを巻きさり、狂^{はや}風これを吹きちらさん。汝はエホバによりて喜び、イスラエルの聖者によりて誇らん。

神さまを誇るんですよ。

17 貧^ひしきものと乏^ひしきものと水をもとめて水なく、その舌かわきて衰^{おとろ}えるとき、われエホバ聴きてこたえん、我イスラエルの神かれらを棄てざるなり。

慰めの深い言葉だ。決して悲観するな、深く顧みているぞと。あとずつと書いてあるでしょ、みなそれはイスラエルの聖者のエホバのなしたもうところであるということなのです。

18 われ河をかぶろの山にひらき、泉を谷のなかにいだし、また荒野を池となし、乾ける地を水のみなもとと変^かん。19 我あれのに香^か柏、合^あ飲^い木、もちの樹および油の樹をうえ、沙漠に松杉及び黄^{わう}楊^{よう}をとともに置かん。20 かくて彼等これを見て、エホバの手の作^なしたもうところイスラエルの聖者の造り給う所なるをしり、且^{かつ}こころをとめ、且^{かつ}ともどもにきとらん。

神さまの創造のわざはするように壮大雄^{ゆう}渾^{こん}で、自然界は素晴らしい。

天地の創造の創世記1、2章を読むと、自然界の中で最後に人の創造がきている。「ひと」は、

「霊^{ひと}止」

と書く。神霊^{とど}が止まる。神の似姿に造られている。神と同質に造られている。ただ似ているのではない。ドイツ語でいう

「エーベンビルト」(正に同じような姿)

ということなのです。

「息を吹きいれたから、生けるもの、生霊となった」

という。神さまの創造のわざの中で、パスカルも言っているとおりの、人間は極小的な存在です。この小さな地球の中にいる何十億という人間の中の我々一人ひとりという、極小的な存在としての人間はその一人ひとりが顧みられている。一人ひとりが神さまにのっぴきならない存在として顧みられている。これは実に神秘的な世界です。

我々は、人格というのとは物ではない。神格を映している人格なんです。人格の本当の言葉は神格です。民主主義なんていうのはとんでもない。民主主義の奥に神主主義がある。神さまが主であることが立たないような民主主義はおかしなことになる。

創造のわざの最後に、この小さな我々が神と同質に造られていることに、本当はまた驚嘆しなければならんだ。極大の世界の中にこの極小なるものがある。粟粒にもならないような私たちに実は、神さまの元始の力が入っている。物理の世界ではない元始力生命



が宿っている。これが死んでたまるかと、神さまの方では思っていらっしゃるわけだ。神さまは我々一人ひとりをそのようにして愛している。そして、やがて最後の新天地の世^{あがない}界^{あがない}いたって、どんなに驚くべき霊的空間に入れられて、天界がひらけるか。私はそういう世界をもう夢みている。

創造の本当の意味は、内実は、

「我々が造られたということの自覚にくる」

ことなんです。そのように私たちは神さまに造られた。誰も人間を、この生命を作ること
はできない。しかも、それは神の似姿であるということ。それがやりそこなったから、神
さまはそれを造り変えるというのがこの救贖^{あがない}なんです。

「私はお前を造りかえてやる。そして、自分の目的を本当に達して、最後の新天地

地で一人ひとりをそれぞれ素晴らしいことにしてやるぞ」

と。指紋が違うくらいの、神さまは最大の芸術家だからね。芸術にたずさわる人はこの神
のわざに参与しなかったらダメです。芸術でも学問でも事業でも何でもいい。みな神のわ
ざだから。もうそうしたら、人生は豊かな泉です。人に何と思われようが、そんなことは
問題でなくなってしまう。神・キリストを相手にして、そして、人の中に見えていること
ろのキリストの姿を見ていく。神を見るとは、人において神の姿をそこに見るということ
です。

